



川崎汽船株式会社 代表取締役社長

明珍幸一

岡倉天心が米国のフェノロサとともに日本美術院を創立し、その2代目所長に川崎汽船社長明珍幸一氏の祖父が就任、仏像の修復にたずさわった。その事業を父、弟と継ぎ、明珍氏は海運業へ。

グローバルな競争下にある海運業では、多くの学びがあったという。1990年代後半にコンテナ船社のコンソーシアムを中国、台湾の会社と組成した際、政治的な背景もあり、同社が台湾の船会社と中国の船会社の橋渡しという役割も担った。その際、中国の会社の相手側が非常に聡明でなかつ交渉の進め方も海千山千、いつも交渉時にやりこめられた。しかしある時、どうしても通したい案件があった。中国の会社の担当と二人だけの時に話をしたら、「こういう提案をしてみたら」とアドバイスをくれ、公式の場で展開したら、受けてくれたという。長い付き合いの中で信頼関係を深めていくと、こういうこともあるのだと感動したという。粘り強く、実直な明珍社長の人柄が表れたエピソードである。好きな言葉は、「人間万事塞翁が馬」。一喜一憂しないことが大事だ、と語る。つねに努力し、うまくいかないことがあったとしても、それをきつかけにさらに自分を見直して成長していけばよい。ピンチはチャンスだ、と。市況に大きな影響を受ける業界のトップとして、これ以上の人はいないと思わせる人物である。

「低炭素・脱炭素化」を加速させ、グローバル社会における重要なインフラとしての役割を果たす

世界を舞台に物流の重要なインフラとして、その役割を果たしてきた海運業。グローバル社会における海運業の現状と今後を、川崎汽船の明珍幸一社長に語っていただく。

時代に合わせた技術革新で

世界の物流を支える

「縁の下の力持ち」

伊藤 海運業はグローバル社会といわれる以前から、ポードレスのグローバルな舞台で、その役割を果たしてこられました。普段の生活でみなさんの目には留まらないうえ、その役割はとても重要ですね。

明珍 原油や石炭などのエネルギー資源はほぼ100%、鉄鉱石も100%、食料に関しては大豆が94%、小麦が84%、衣料についても98%が輸入と、日本は資源や物資の海外依存度が高いのはご既承の通りですが、重量ベースで見

ても日本における輸出入の99.5%を海上輸送が担い、そのうちの6割を我々のような日本の船社が支えていることはあまり知られていません。目立ちませんが、縁の下の力持ち的存在です。例えば自動車は「自動車専用船」という12層〜13層もある巨大な駐車場が海上に浮かんでいような船型を使うなどして輸送していますし、鉄鋼原料や石炭、穀物といったばら積み船の単一貨物を大量に輸送する「ばら積み船」もあります。

また、原油や摂氏マイナス16.2℃に冷やしたLNGなどの液体輸送に特化したタンカー、製品そのものをコンテナで運ぶコンテナ船など、それぞれの貨物に対応した本船を建造、運航しています。従って、我々の顧客層も鉄鋼会社、

電力会社、エネルギー会社、自動車、建機メーカーから消費財メーカーに至るまで多岐にわたります。

多種多様なかたちで日本の貿易を地道に支えるというのが我々の使命であり、重要なサプライチェーンの一部として、海上物流を絶やすことなく、世界の経済活動や社会の持続的成長、私たちの日々の暮らしを支えることが最大の責務と認識して、日々仕事に励んでいます。

伊藤 グローバル社会の重要なインフラという役割を果たしてこられているということですね。

明珍 海上輸送というのは、我々が考える中でもっとも経済効率性が高く、かつ環境への負荷が相対的に少ない輸送方法です。